



鳥取県八頭郡郡家町

土師百井廃寺跡発掘調査報告書Ⅱ

1980. 3 .20

郡家町教育委員会

# **土師百井廃寺跡発掘調査報告書Ⅱ**

**郡家町教育委員会**

## 序

この調査は、土師百井廃寺跡の保存にかかるもので、その寺域と思われる部分が、昭和52年度から実施されている県営八頭中央地区整備事業の範囲に含まれており、近くその事業が施工の見通しとなったため、事前に調査を実施したものです。

本調査はトレンチ方式により、寺域と伽藍配置等を確認するためのもので、昭和58・59年度の2カ年の調査によって、所期の目的が達成できました。

調査を実施するにあたっては、御指導いただいた方々や、その他関係各位に対し、本調査報告書の紙上をもって深く感謝と敬意を表します。

昭和55年8月20日

郡家町教育委員会

教育長 石 谷 収

---

## 例 言

1. 本書は、昭和54年度の国庫補助を受けて調査した土師百井廃寺跡の発掘調査報告書である。
2. 本書に使用した方位は、磁北をさす。
3. 現地調査は、三木薰、吉村博恵が担当、県文化課野田久男が指導、同森田純一、清水真一の協力も得、町教育委員会丸山勉が補佐した。
4. 本書の作成は、吉村博恵が担当し、町教育委員会が編集した。
5. 写真は、調査遺構については吉村博恵、町教育委員会、遺物は野田久男が担当した。

## 調査団名簿

- 調査団長 石谷 収（町教育長）
- 調査員 古村 博忠（大阪府立佐野高校勤務）  
三本 薫，岡本君太郎，入江 清，山崎 勝，田中信行  
森岡弥寿夫，木村鶴藏，栄田光夫，上嶋武夫（町文化財保護審議会委員）
- 調査指導 野田久男（県教育委員会文化課）
- 事務局 板田 亘，丸山 勉（町教育委員会社会教育係）
- 調査補助員 有田卓男，山本博己，今島秀樹，山本定博，日野孝司
- 作業員 西尾 耕，植田和恵，上嶋和子，上田君江，上嶋久恵  
藤田きみ野，西尾艶子，西尾ふゆ子，森木もう，宮田その  
宮田芳子，宮田豊子，大野和江
- 調査協力 三木 薫，森木芳太郎，藤田 稔，森下光明，三木鶴三  
森木幸美，三木 藏（土地所有者）  
森田純一，清水真一（県教育委員会文化課）  
笹尾千恵子，大賀靖浩，中村 徹，平川 誠，久保権二朗

## 本文目次

第1章 調査に至る経過 .....	1
第2章 調査の結果 .....	2
第1節 遺構 .....	2
1. 金堂跡地区 .....	2
2. 中門跡地区 .....	2
3. 講堂跡地区 .....	3
4. 回廊跡地区 .....	3
5. 南大門跡地区 .....	3
6. その他 .....	4
第2節 遺物 .....	20
1. 瓦 .....	20
(1) 軒丸瓦 .....	20
(2) 軒半瓦 .....	20
2. 土器 .....	20
3. 鉄釘 .....	20
第3章 土師百井廃寺に関する考察 .....	23
1. 伽藍の建築的考察 .....	23
(1) 金堂 .....	23
(2) 塔 .....	23
(3) 講堂 .....	24
(4) 中門 .....	25
(5) 伽藍配置 .....	25
2. 寺域と立地 .....	25
第4章 まとめ .....	27

## 挿図・図版目次

挿図 1.	土師百井廃寺跡周辺遺跡位置図	1
" 2.	土師百井廃寺跡トレンチ位置図及び伽藍配置推定図	5
" 3.	第1トレンチ実測図	7
" 4.	第2トレンチ実測図	8
" 5.	第8・5トレンチ実測図	9
" 6.	第4トレンチ実測図	10
" 7.	第6・7トレンチ実測図	11
" 8.	第8トレンチ実測図	12
" 9.	第8・9トレンチ実測図	13
" 10.	第10トレンチ実測図	14
" 11.	第11・12トレンチ実測図	15
" 12.	第13トレンチ実測図	16
" 13.	第14トレンチ実測図	17
" 14.	第15・16トレンチ実測図	18
" 15.	第17・18トレンチ実測図	19
" 16.	軒丸瓦・軒平瓦実測図・拓本	21
" 17.	土器・鉄釘・礎石実測図	22

写真図版 1. 土師百井廃寺跡付近全景, 第2トレンチ調査前, 第2トレンチ金堂基壇

- " 2. 第3・5・6トレンチ発掘前, 第3・5トレンチ金堂基壇, 第4トレンチ回廊礎石
- " 3. 第8・5トレンチ金堂基壇, 第4トレンチ回廊礎石, 第7トレンチ
- " 4. 第10トレンチ(東)(西), 第18トレンチ(東)講堂礎石
- " 5. 第18トレンチ(西)講堂礎石, 第14トレンチ, 第16トレンチ講堂礎石
- " 6. 土師百井廃寺跡出土軒丸瓦
- " 7. 土師百井廃寺跡出土軒丸瓦, 軒平瓦
- " 8. 高杯の脚, 須恵器杯の口縁部, 須恵器杯の高台部, 土師質壺口縁部, 土師盤, 土師質碗口縁部
- " 9. 土師質壺底部, 火鉢片, 大甕底部
- " 10. 鉄釘, 奥谷瓦窯跡

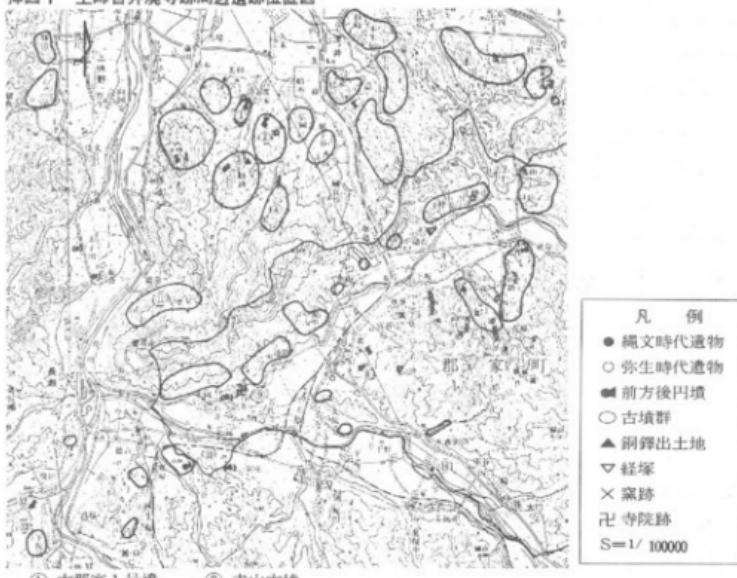
# 第1章 調査に至る経過

土師百井廃寺跡は、塔跡部分のみ昭和6年11月26日に国指定史跡になっていたが、寺域・伽藍配置等は今日まで確認されていなかった。

この度、寺域と思われる部分が、県営八頭中央地区は場整備事業の範囲に含まれており、関係機関と協議の結果、事前に発掘調査を行い、寺域・伽藍配置等を確認することになり、昭和58年度国庫補助事業（事業費200万円、発掘面積224m<sup>2</sup>）で調査を実施した。ひきつづき昭和54年度も国庫補助事業（事業費200万円、発掘面積269.8m<sup>2</sup>）で調査を実施し、2カ年で終了した。

その結果、土師百井廃寺跡は、鳥取県八頭郡郡家町大字土師百井字慈住寺と字淵ノ上に所在し、築地、講堂、金堂、中門、回廊跡等が確認された。

插図1 土師百井廃寺跡周辺遺跡位置図



- ① 古郡家1号墳
- ② 六部山3号墳
- ③ 越路銅鐸出土地
- ④ 空山古墳群
- ⑤ 梶山古墳
- ⑥ 下坂銅鐸出土地
- ⑦ 奥谷瓦窯跡
- ⑧ 寺山古墳
- ⑨ 土師百井廃寺跡
- ⑩ 郷原7号墳
- ⑪ 稲常古墳群
- ⑫ 獄古墳
- ⑬ 佐貫古墳群(大平古墳他)
- ⑭ 西御門遺跡

## 第2章 調査の結果

### 第1節 遺構

#### 1. 金堂跡地区（第2・3・5トレンチ）

昨年の第1次調査により金堂基壇西端および南端を確認していたので、それに基づいて各トレンチを設定した。

第2トレンチは約80cm掘り下げたところから赤褐色粘質土を含んだ黄褐色土の基壇面と金堂東南隅の石列を検出することができた。石列は長さ50~100cm、幅20~30cmの花崗岩の自然石を立て並べたものであった。南端外側には石列にそって20~30cmの河原石が並んでおり、暗褐色土を用いて埋められていた。第3トレンチ・第5トレンチでは約20cm掘り下げたところから赤褐色粘質土を含んだ黄褐色土の基壇面と金堂北端の石列および西北隅を検出した。石列は長さ20~45cm、幅約20cmの河原石で築かれており、基壇黄褐色土との間約1mには小石や瓦片を含んだ暗褐色土面があった。

金堂東南部分の花崗岩自然石の石列は創建当時のものと考えられるが、北西部および西、南端部（昨年の調査で検出した）の河原石で構築されている石列は後世——暗褐色土内から土師塊底部（挿図17, 9）出土——に補修されたものと考えられる。また東南部分の南端にそった河原石もこの時に補強のためそえられたものであろう。——河原石を埋めた暗褐色土内より土師塊底部（挿図17, 7・8）出土——金堂の基壇の規模は南北15.8m・東西18mとなり、残高は約40cmである。

#### 2. 中門跡地区（第1・12・18トレンチ）

昨年の調査により出土した花崗岩平石列に基づいて、中門基壇および西側部検出のため第1トレンチ（夏期）、第12トレンチ（秋期）を設定した。また平石列の用途を確認するために第18トレンチを設定した。

中門跡西側部は現在荒地となっているうえ、最近までは梨畑であったことなど、後世のたび重なる擾乱により、建築遺構を検出することはできなかった。とくに第1トレンチには近年瓦などを捨てるために、長径約5mの大穴を掘って埋めており、中からは小ピンやプラスチック製品などが出土した。中門跡東側は西側部に比べて1段（約50cm）低くなった畠地である。平石列をはさんで東西に第18トレンチを入れたが、基壇および側溝などの建築遺構は検出できなかった。

### 3. 講堂跡地区（第9・13東・13西・16・17トレンチ）

講堂跡地区は道路をはさんで東は畠地、西は荒地・畠地となっている。

第13東・西トレンチおよび第16トレンチから4個の原位置を保った礎石が出土した。礎石はすべて円形の造出礎石で、柱座が径49cmのもの3個と径86cmのものの2種類あり、うち2個には水切溝がつけられていた（挿図17）。基壇の土は金堂のように固く叩きしめられた赤褐色粘質土を含んだ黄褐色土ではなく、暗褐色粘質土をやや固くした程度のものであった。講堂の堂の平面は礎石の配置から桁行8間、梁行4間で 29m × 15m であると考えられる。基壇端については第9トレンチ・第18トレンチとも後世の擾乱などによる削半や涌き水などにより十分に検出することはできなかった。

### 4. 回廊跡地区（第4・6・7・11・15トレンチ）

北回廊 第4トレンチは講堂の西にあたる荒地に設定した。昨年、西回廊でみられたような河原石の石列は検出することはできなかったが、径27cmの柱座のある礎石が出土し、トレンチ北側には回廊外部の雨落部にあたると考えられる河原石、小石群が検出された。また講堂の東にあたる畠地に設定した第15トレンチは削平されていて、遺構を検出することはできなかった。

西回廊 昨年検出した河原石を立て並べた回廊の続きを確かめるため第6トレンチ（夏）、第7トレンチ（秋）を設定した。第6トレンチでは黄褐色砂礫土と茶黄色土を固く叩きしめた面があり、トレンチ西側からは幅130cm、深さ40cmほどの溝が検出され、径10～20cmの河原石が溝内からいくつか出土した。立石列は見られなかった（崩れたものと考えられる）が、回廊面および回廊に伴う側溝の一部を検出した。第7トレンチは梨木の肥料穴が2カ所（1つは径3m・深さ1m）あり、かなり擾乱されていたが、東端部には回廊内側と思われるところに河原石や瓦片群が検出された。西側には1.4m×1.8mの花崗岩の平石が出土しており、回廊外に位置することになるが、すえられた理由は明らかではない。

南回廊 推定中門跡の東の畠地に設定した第11トレンチは後世の擾乱により削平されていて遺構を検出することはできなかった。

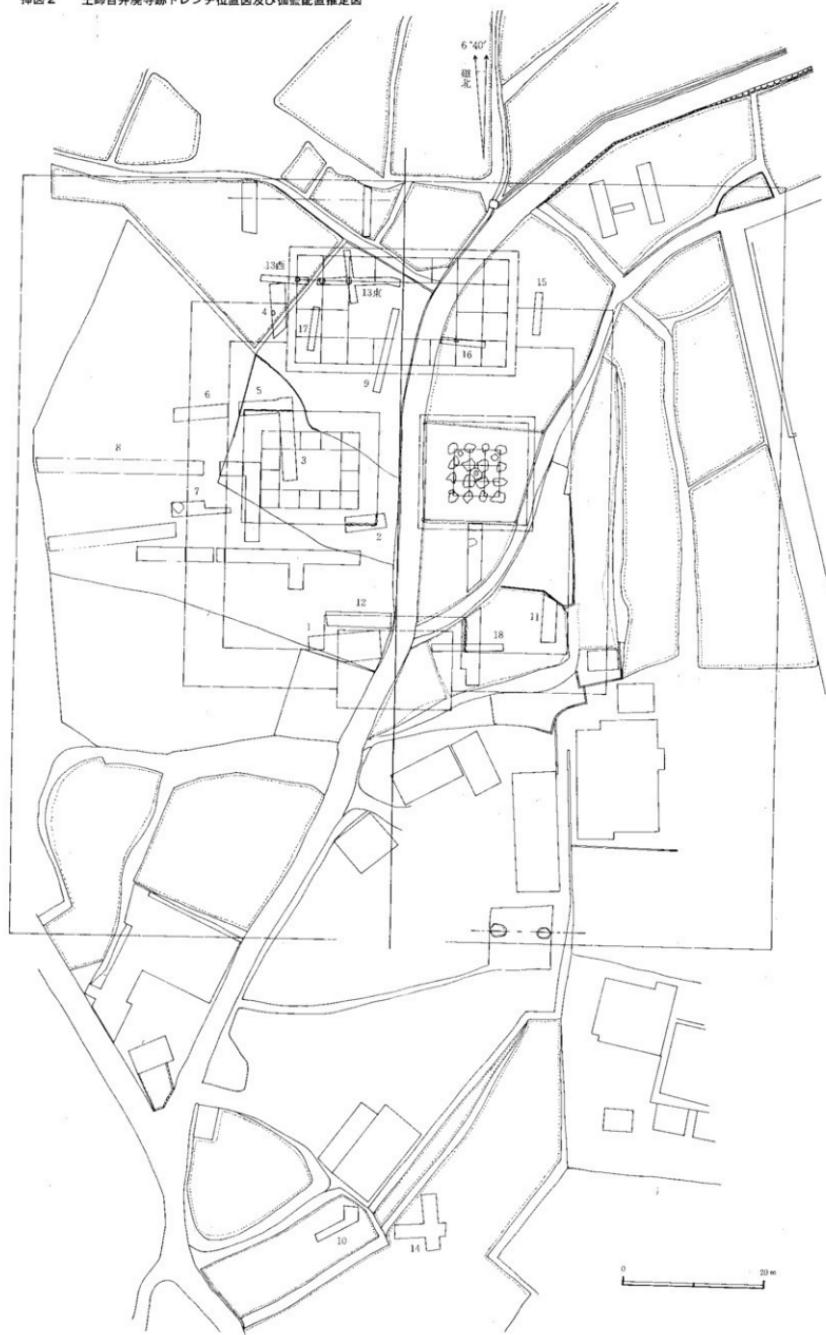
### 5. 南大門跡地区（第10・14トレンチ）

近年、調査員の三木薦氏所有の畠より礎石が発見されており、その証言に基づいて畠地に2カ所トレンチを設定した。第10トレンチでは約50cm掘り下げたところから10～30cmの河原石が2群にわかれて散在して出土した。第14トレンチからも耕作土直下に10～20cmの河原石が散在していた。これらの石群が何を意味しているのか明らかではなく、南大門の存在を確かめることはできなかった。

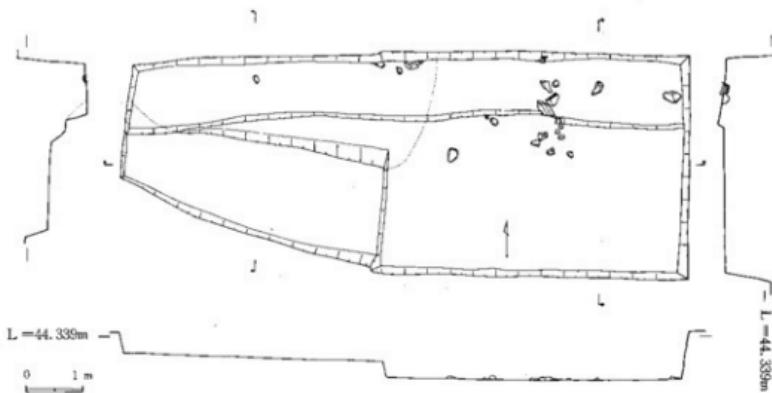
## 6. その他

昨年の調査で御藍西に西方建物があるのではないかと思われたので、寺域西端の確認も含めて第8トレンチを設定した。このあたりは北の船伏山から流出した土砂がかなり堆積していたため、建築遺構のないことを確認したうえで、北壁側に幅50cmのトレンチを掘り下げていった。西側に約5mにわたる瓦の堆積層があり、多くの軒丸瓦も出土したが、この層は瓦を捨てた場所と考えられる。

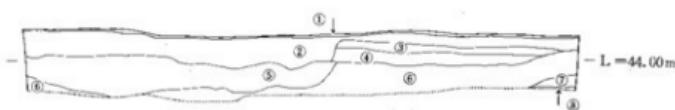
挿図2 土師百井廃寺跡トレント位置図及び伽藍配置推定図



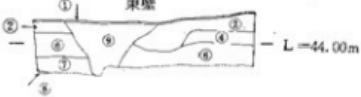
挿図3 第1トレンチ実測図



北壁



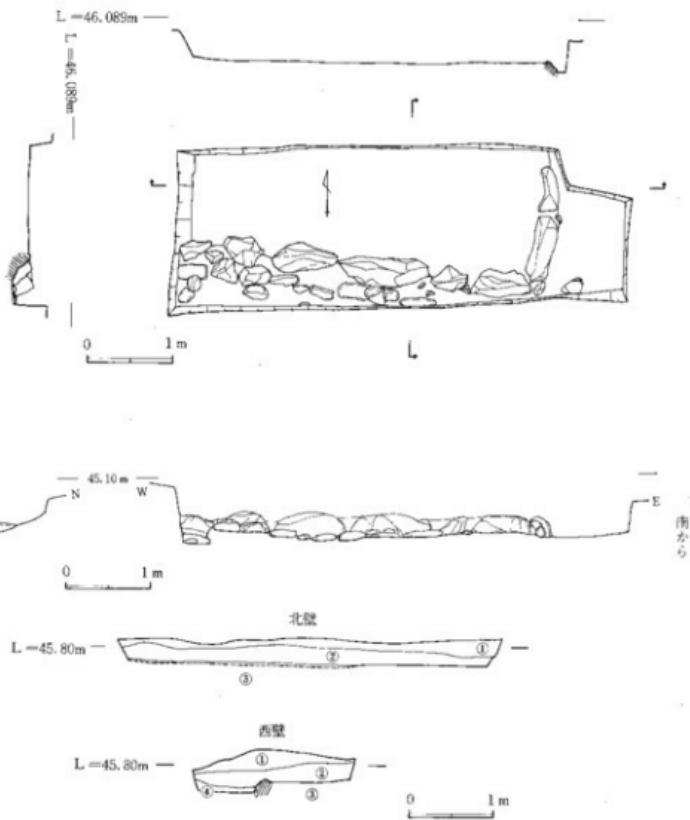
東壁



0 1 m

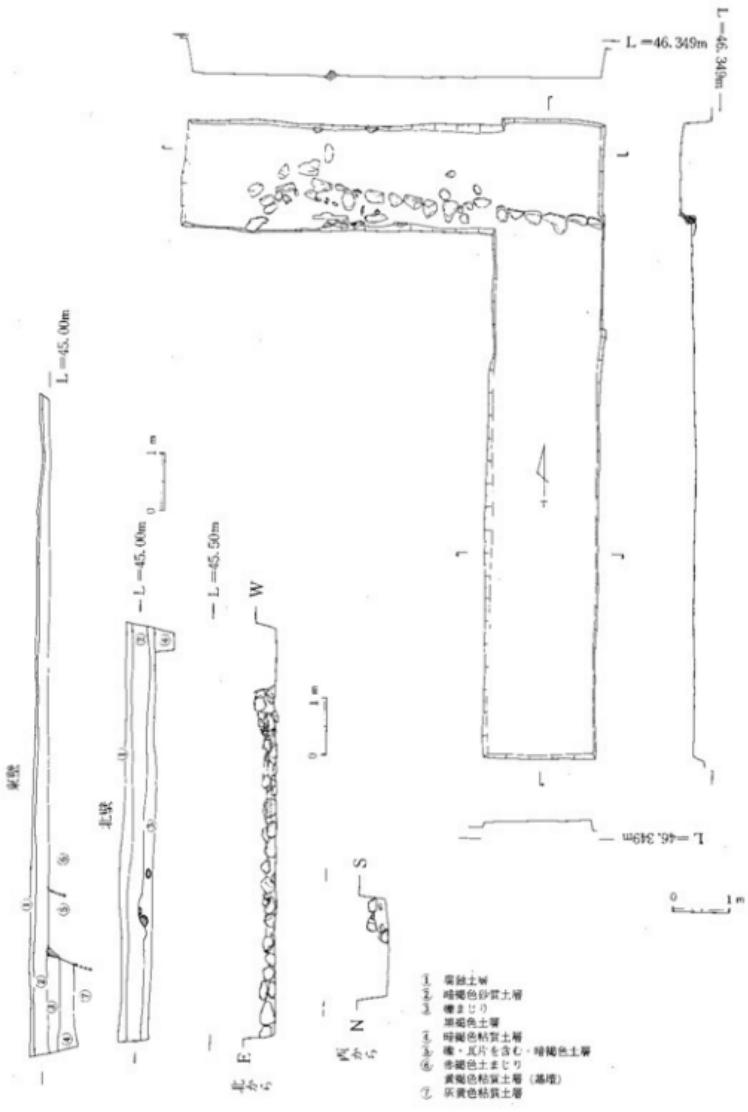
- ① 黄褐色土層
- ② 暗褐色砂質土層
- ③ 暗褐色粘質土層
- ④ 厚さ10cm程度の暗褐色粘質土層
- ⑤ 多量の瓦礫含む暗黄色土層(瓦だめ)
- ⑥ 厚さ10cm程度の暗褐色粘質土層
- ⑦ 厚さ10cm程度の暗褐色粘質土層
- ⑧ 黄褐色土とじり暗灰色粘質土層
- ⑨ 黑褐色砂質土層

挿図4 第2トレンチ実測図

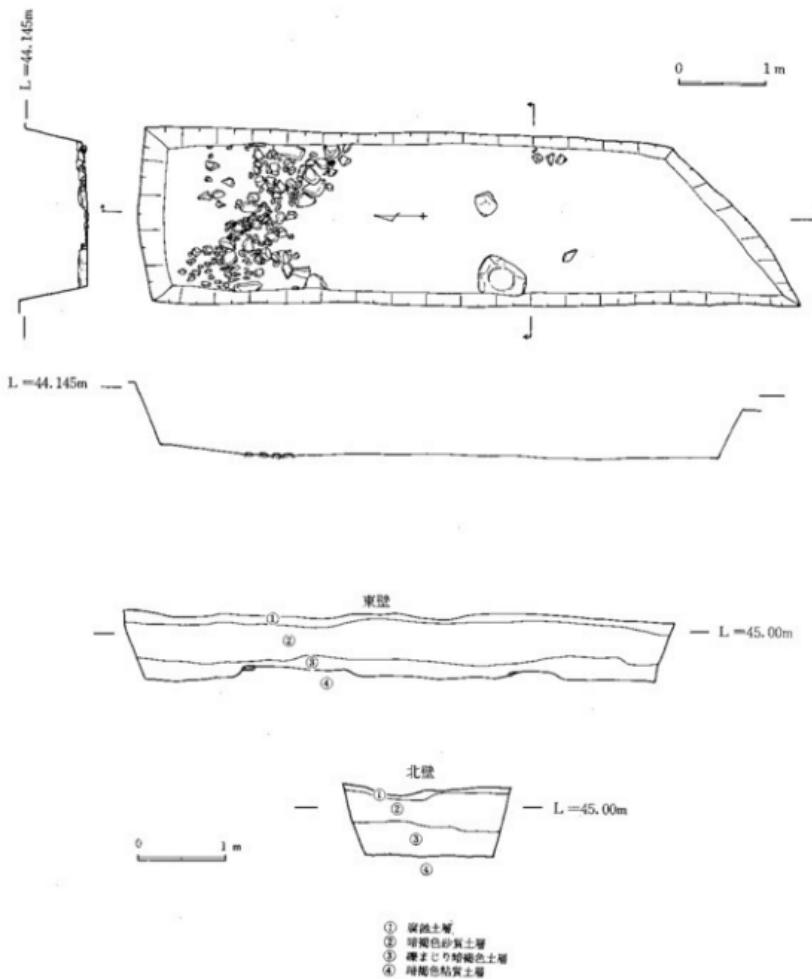


- ① 壤土層
- ② 磚まじり  
暗褐色砂質土層
- ③ 暗褐色粘質土層 (基礎)
- ④ 黄褐色土層

図5 第3・5トレンチ実測図

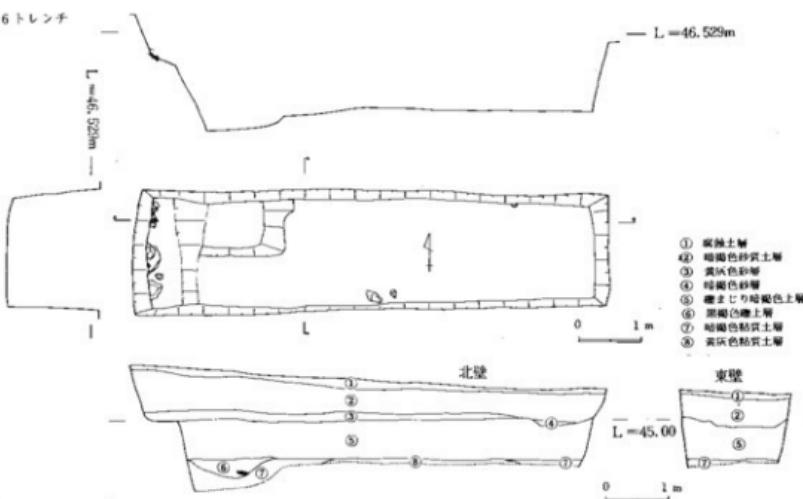


挿図6 第4トレンチ実測図



挿図7 第6・7トレンチ実測図

第6トレンチ



第7トレンチ

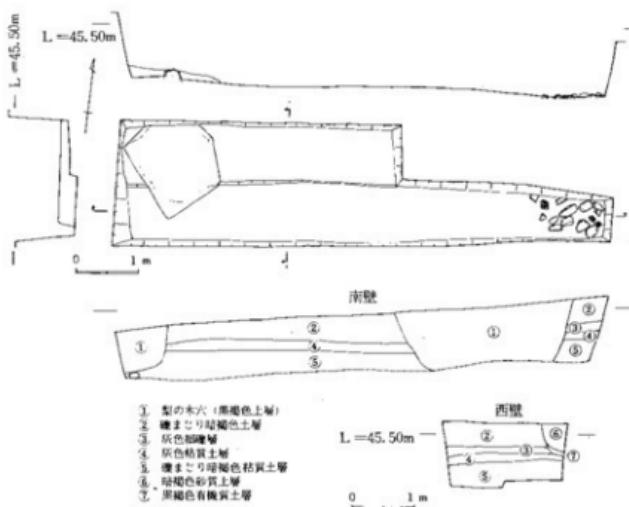
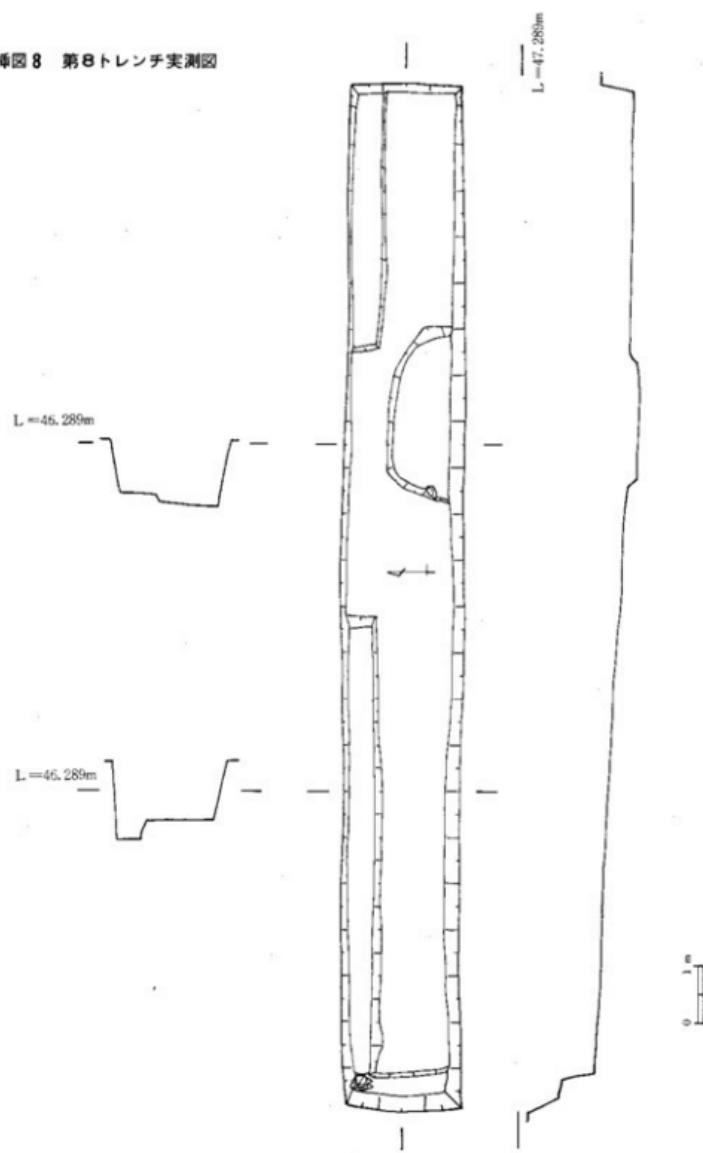
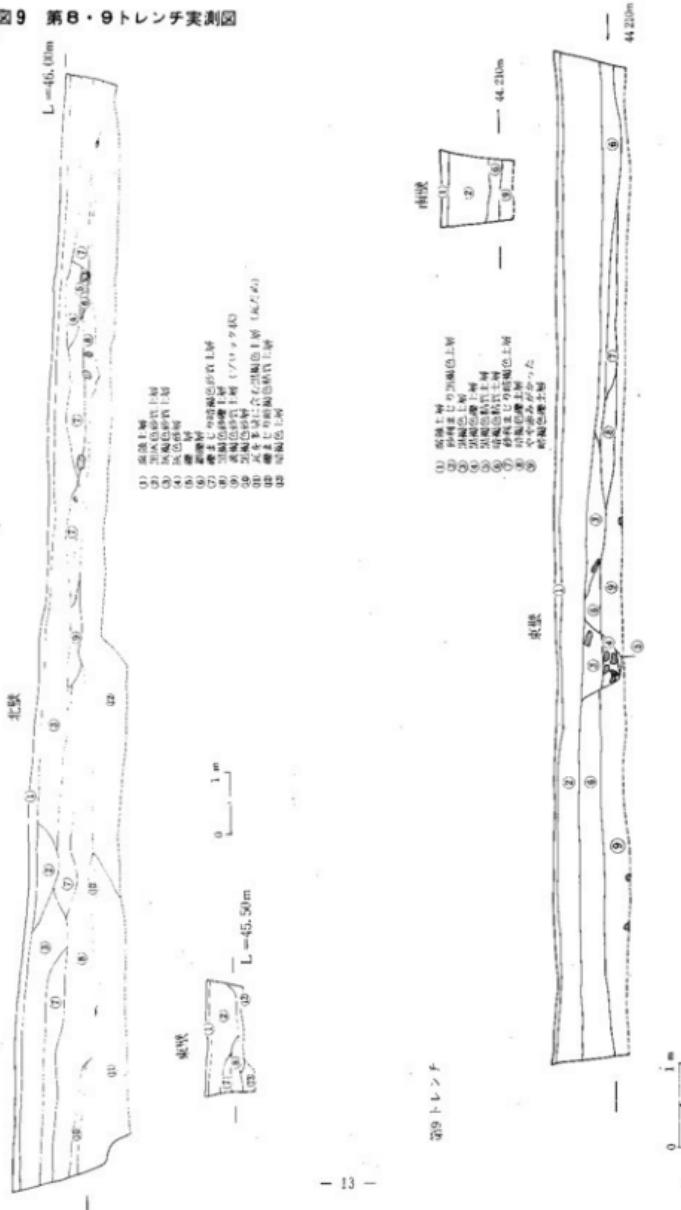


図8 第8トレンチ実測図

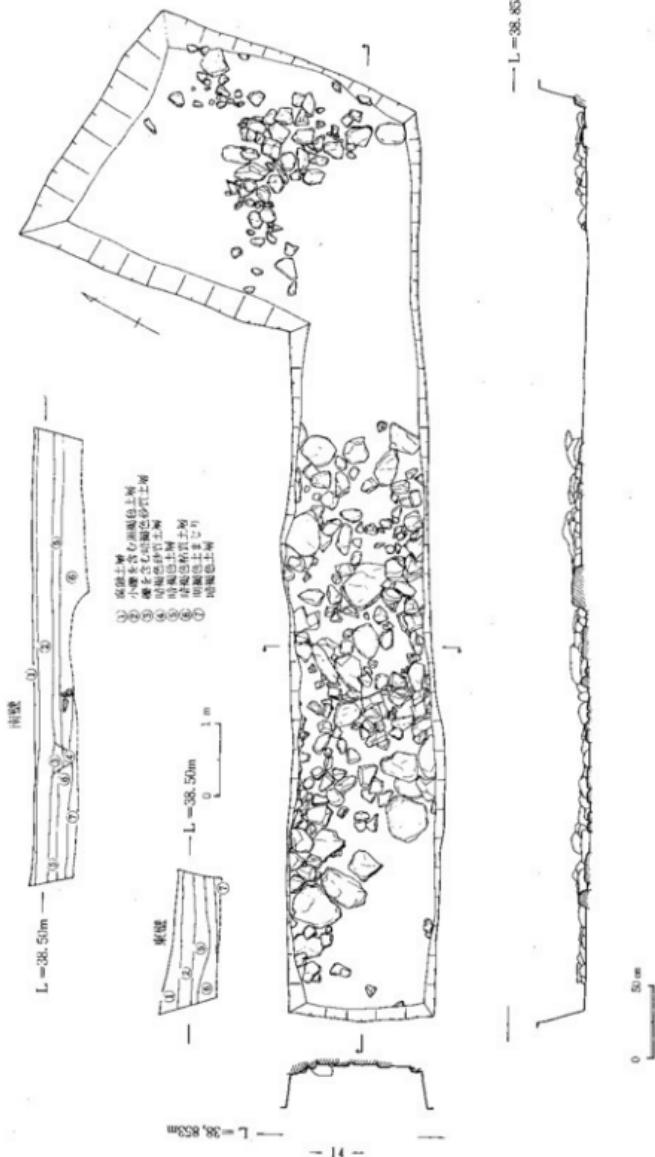


第8十五回

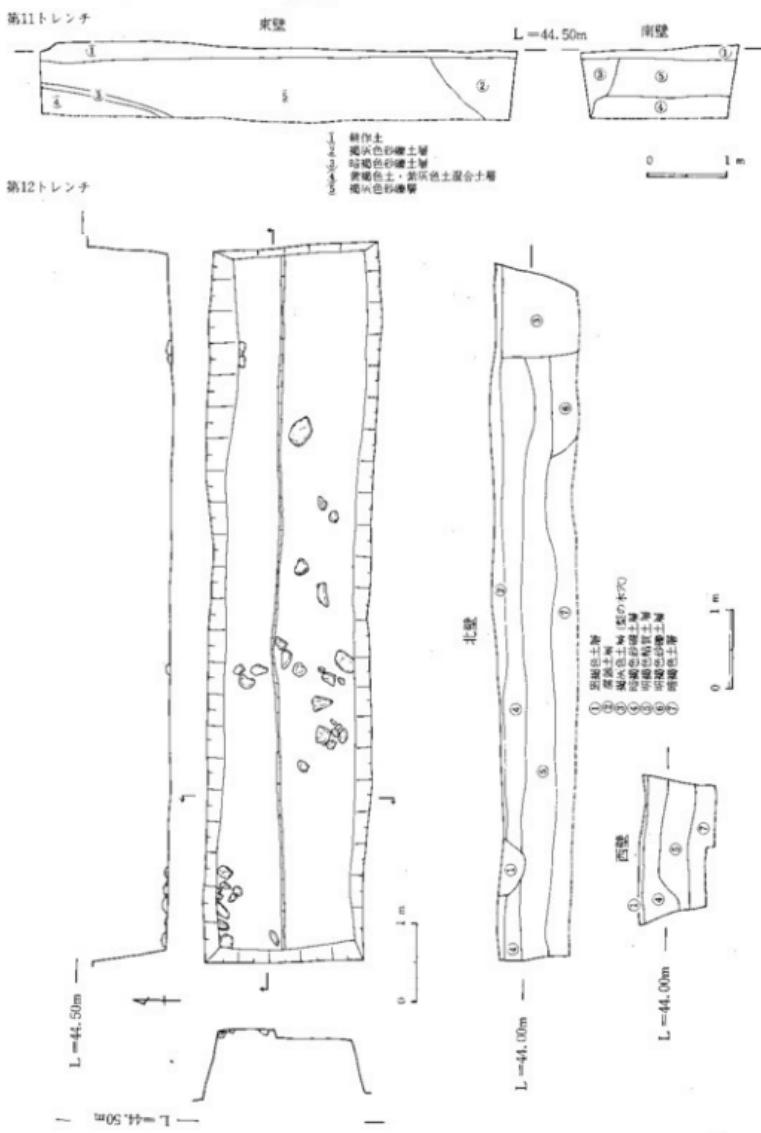
挿図9 第8・9トレンチ実測図



挿図10 第10トレンチ実測図

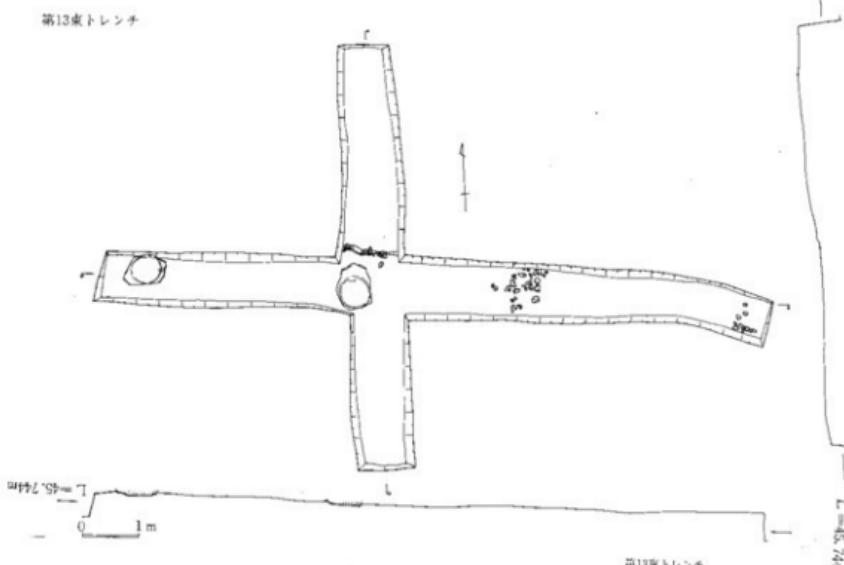


挿図 11 第11・12トレンチ実測図



挿図12 第13トレンチ実測図

第13東トレンチ



第13西トレンチ

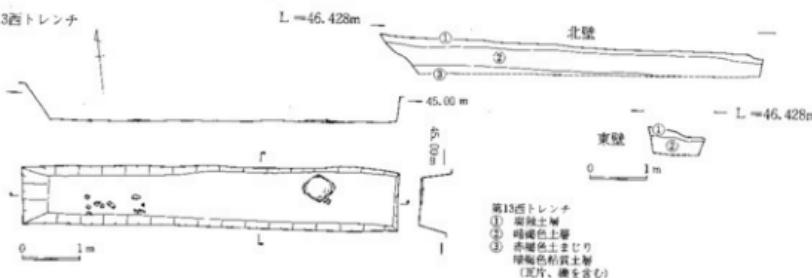


図13 第14トレンチ実測図



挿図14 第15・16トレンチ実測図

第15トレンチ

44.188m 東壁  
43.188m 北壁  
耕作土 (黒灰色土層)  
黒褐色粘質土層  
0 50 cm

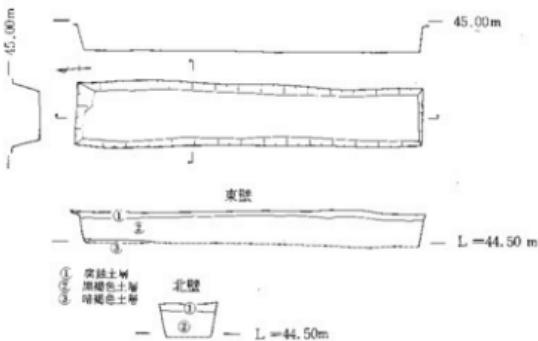
第16トレンチ

耕作土  
増強黒灰色土層  
L=45.00m  
L=45.50m  
1 m  
東壁  
北壁  
L=45.50m

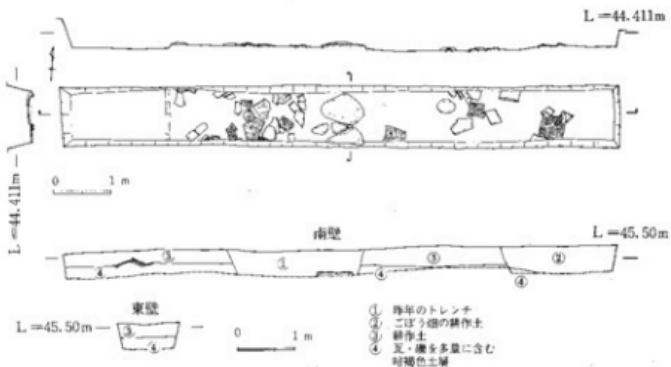
- 18 -

挿図 15 第17・18トレンチ実測図

第17トレンチ



第18トレンチ



## 第2節 遺 物

### 1. 瓦

#### (1) 軒丸瓦(插図16, 1~7)

軒丸瓦は小片も含めて12点出土した。11点は從來報告されている土師百井式の重圓文ハ葉素弁蓮花文—土師百井第1様式—であった。

7は今回はじめて第8トレンチ中央部から出土したものである。花弁は薄肉広弁で弁先端部が少し山高くなつておき、子葉は有さない。間弁は小さく、広くて低い。内区と外区の間に幅の異なる二重巻を有し、周縁は無文で高い。中房部は破損して不明である。この瓦はすでに土師百井庵寺の瓦窯である奥谷瓦窯跡で出土していることが『鳥取県文化財調査報告書 第1集』や『千代川 4』(鳥取大学歴史学研究会)などに報告されている。この瓦を土師百井第2様式とする。

#### (2) 軒平瓦(插図16, 8)

軒平瓦は1点だけ第8トレンチ中央部より出土した。二条のやや深い溝を有し、山部を簡単に丸く整形した重圓文であり、端部は途中までつながつてゐる。

### 2. 土 器(插図17, 1~12)

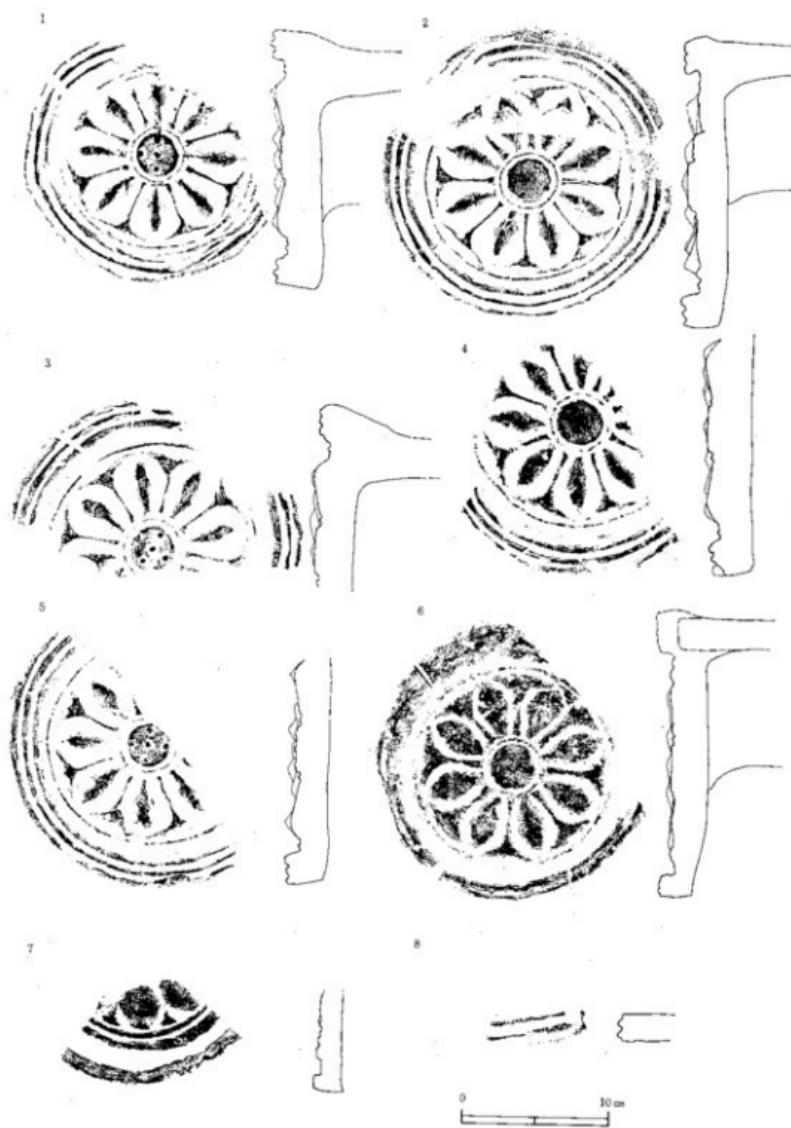
廃寺関係の土器は須恵器杯の口縁部2, 同高台部3と高杯の脚1があり、土師器5がある。廃寺以後の土器は土師質碗底部7~10と口縁6があり、7の底部ははっきりと糸切り痕が残つてゐた。土師質壷口縁4の内面には煤が付着していた。瓦質土器としては大甕底部12と火鉢片11が出土した。

土器の出土は第2トレンチ(7, 8), 第8トレンチ(2, 9), 第4トレンチ(3), 第6トレンチ(11), 第7トレンチ(5), 第1トレンチ(4, 6, 10, 12), 第11トレンチ(1)となる。その他第1, 6, 7, 8各トレンチから須恵器の大甕片, 瓦片などが出土している。

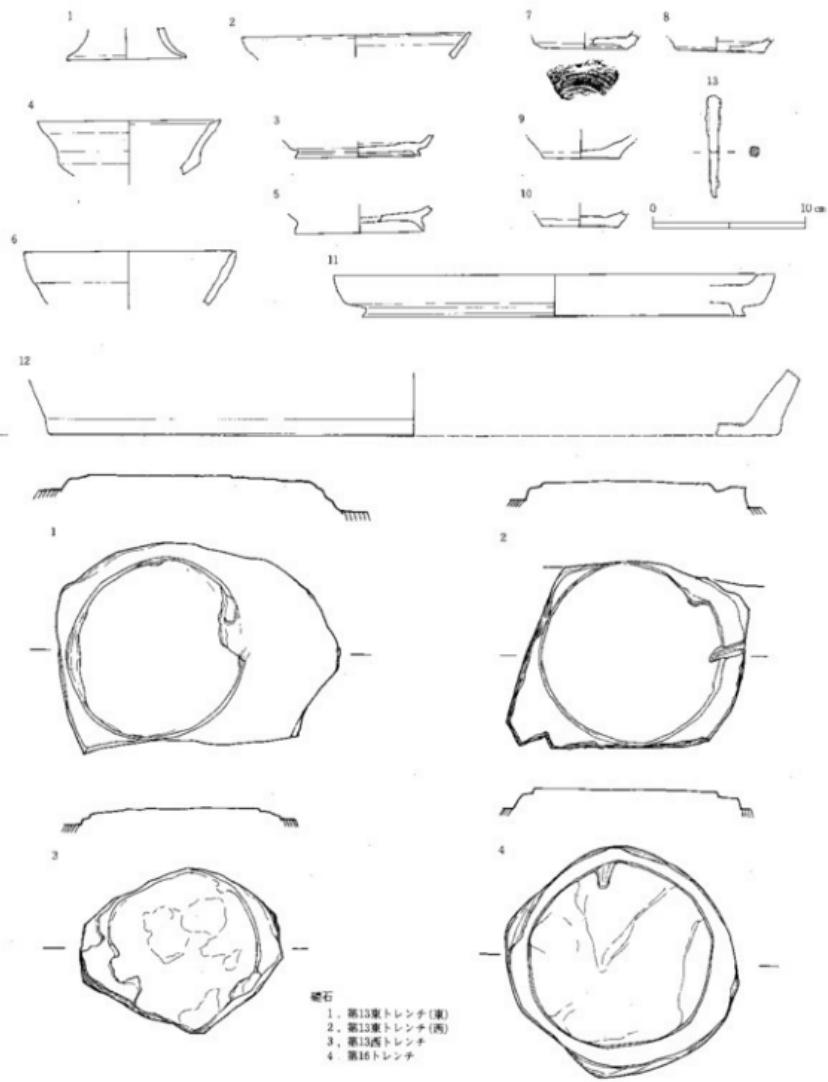
### 3. 鉄釘(插図17, 13)

鉄釘は長さ6.7cm, 一辺6mm四方と小さなもので、第6トレンチ黄灰色粘質土層(回廊)上から出土した。

插図 16 軒丸瓦・軒平瓦実測図・拓本



挿図 17 土器・鐵釘・礎石実測図



1. 第13東トレンチ(東)  
2. 第13東トレンチ(西)  
3. 第13西トレンチ  
4. 第16トレンチ

## 第3章 土師百井廃寺に関する考察

### 1. 伽藍の建築的考察

土師百井廃寺の発掘調査は2カ年にわたり行なわれた。期間などに制限があり、部分的なトレーニング発掘のため十分に調査することはできなかったが、かなりの成果をあげることができた。遺跡は塔のように心礎を含めて礎石の完存するものから講堂のように礎石が4個検出されたものや、金堂、中門のように今回の調査では基壇端部や周辺部しか検出できなかったものまでいろいろであった。以下、伽藍について若干の考察を試みてみよう。

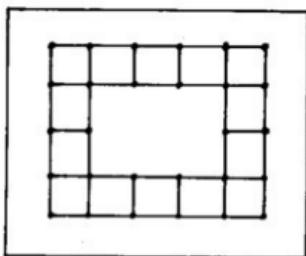
#### (1) 金 堂

金堂の堂の規模は礎石などを検出できなかっただため、明確にすることはできないが、基壇は調査により二次的な補修および補強が行なわれたことが明らかとなった。その規模は桁行19m・梁行16mとなり、大尺（高麗尺）による58尺×45尺である。基壇端は創建当初はかなり大きな花崗岩の自然石を立て並べ、同小石を間に埋めて構築されていた。基壇内の土は黄褐色土が主体となっており、赤褐色粘質土および褐灰色砂礫土を用いて固く叩きしめられていた。

二次的補修の箇所は約1mにわたり小石や瓦片などを含んだ暗褐色粘質土が入れられており、同じ土で基壇周辺部を盛り上げている（伽藍内平面の黄灰色粘質土より約30cm高く）。基壇端には10~30cmの河原石を1~2段積んで築いている。補強部分（基壇南端東部）は20~30cmの河原石を基壇端に沿ってするとともに暗褐色粘質土で埋めている。補修、補強の時期は暗褐色粘質土内から数片の土師質焼底部が出土しており、平安時代以降であろうと考えられる。

基壇の大きさ（桁行58尺×梁行45尺）から、

一案としては、桁行5間・梁行4間で38尺×30尺の堂を想定し、桁行中央3間と梁行中央2間が8尺で各両端が7尺であったと推定することができよう。



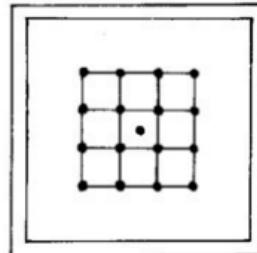
#### (2) 塔

塔跡はすでに昭和6年に史跡に指定されており、心礎をはじめ17個の礎石が残存していて、今

までにも多くの報告が行なわれている。

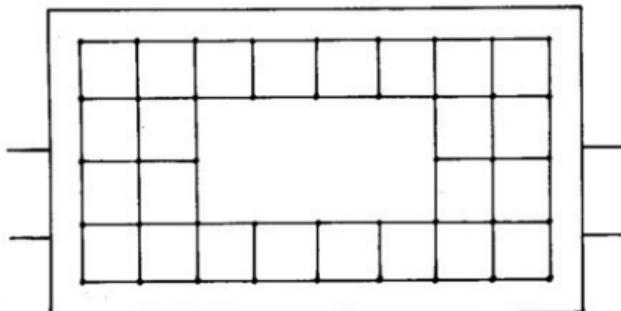
塔堂は一辺8間(1間各6尺)で $6.4\text{ m}$ (18尺)四方である。心礎は礎石群より $64\text{ cm}$ (1.9尺)低くすえられており、柱座は幅 $68\text{ cm}$ (1.9尺)・深さ $9.6\text{ cm}$ (0.27尺)である一重孔式心礎である。心礎柱座径や堂一辺長などから $25.6\text{ m}$ (72尺)の三重塔であったと推定することができる。

基壇は塔堂に比べてかなり大きく $16\text{ m}$ (45尺)四方と報告したが、発掘個所が南面中央であったことから南階段の端とも考えられ、基壇は約 $14\text{ m}$ (40尺)四方とみることができよう。基壇内の土は赤みがかった褐灰色砂疊土を主体としたものであった。



### (3) 講 堂

今回の調査で講堂跡からは4個の礎石を検出することができた。西部(第18東・西トレンチ)からは約 $8.6\text{ m}$ (10尺)間隔に8礎石が並んで出土し、東部(第16トレンチ)の礎石との南北間の距離は $7.8\text{ m}$ (22尺)であった。



以上のことから堂の規模を復原すると、桁行8間・梁行4間の $29.2\text{ m}$ (82尺)× $15\text{ m}$ (42尺)となり、各間は桁行中央2間・梁行中央2間が約 $8.9\text{ m}$ (11尺)で他の各間は約 $3.6\text{ m}$ (10尺)となる。礎石は2種類出土しており、柱座径 $49\sim 50\text{ cm}$ (1.4尺)のものが入側柱のものであり、柱座径 $3.6\text{ cm}$ (1尺)のものは倒柱のものであろう。

基壇は調査においては攪乱などにより明らかにすることはできなかったが、堂の規模や各トレンチの状況からほぼ桁行 $38.5\text{ m}$ (94尺)・梁行 $19.8\text{ m}$ (54尺)ぐらいであろうと推定することができる。基壇内の土は版築を丁寧に行なった形跡ではなく、赤褐色土や疊のまじった暗褐色粘質土

が主体となっている。

#### (4) 中門

中門は今回の2次にわたる調査では明確にすることはできなかった。しかし中門跡地区で中軸線より9.8m東に4.7mにわたる9個の径30~60cmの花崗岩石を用いた平石列があり、漆喰や小石をつめてかなり丁寧にすえられている。中門跡地区西部がたびかきなる攪乱により大半が削平されていて、平石列の性格を明らかにすることはできなかった。この石列を基壇下の延石とすると、桁行19.6m(55尺)・梁行14.9m(42尺)となり、中門としては大きすぎるため、平石列を一応、伽藍内で中門基壇にそぐう雨落部の石列と考えておきたい。

#### (5) 伽藍配置

土師百井廃寺の伽藍は從来から推定されていた「法起寺式」であることが確定した。伽藍の中軸線は真北をさし、講堂、中門(?)の中央および金堂、塔(最端部)間の真中を通っている。伽藍をめぐる回廊は幅5.5m(15.5尺)であるが、礎石が北回廊西部に一個検出されたにすぎず、桁行・梁行の間隔を明確にすることはできなかった。また伽藍など建築に際して用いられた尺度は大尺(高麗尺)であった。

伽藍の特徴としては、①伽藍全体が少し小規模で南北に長いことである。これは立地が北の船伏山と南東部を流れる私都川間の南・東に下降する平坦部の少ない丘陵地形であることが影響していると考えられる。たとえば講堂が金堂・塔に近いことや、金堂・西回廊間が狭いのは、地山(自然地形)が北・西に高くなっていることによるのであろう。②伽藍全体からみて各堂・基壇がかなり大きい。③金堂と塔の基壇南・北端がほぼ平行している。ことなどをあげることができよう。

### 2. 寺域と立地

寺域についてはまず西限が伽藍中軸線より半町のところに約80mにわたり高さ約1.5mの段差があり、1次の第2西トレンチおよび今2次の第8トレンチともに西端部に瓦の堆積がみられる。北限は金堂・塔の東西中軸線より125尺(約44.5m)のところに、1次調査で築地跡らしいものを検出しておらず、一部東西にのびる田畠の境界の段があり、北西隅も現地形上から推測することができる。東・南はゆるやかな傾斜地がつづいていて、耕作などによりかなり崩されており、境界を見出すことはできない。東は西端から折り返して、中軸線より半町と考えられる。南隅は北隅から考えて、金堂・塔中心線より175尺(約62.2m)と考えられ、南隅より5尺北の東西線上に長さ2m×1.5mの花崗岩自然石の平石が2個並んでいる(現在、いくつかの同石の平石

が家屋の下や墓の台石などにみられる)のは無関係ではないと思われる。またこのあたりが通称「ダイモン」(南大門にあたる地)といわれていることも無視することはできない。

以上のことから寺域は一町四方であると考えられ、伽藍からの距離が南限より北限の方が短かいのは北に船伏山がせまっているからであろう。今回の調査で南大門跡として発掘調査を行なった地域は寺域外と考えられ、以前に発見された礎石はかなり小さなものであり、瓦の出土量がたしかに少なかったことから、別の建物があったと考えたい。

最後に、土師百井廃寺の立地理由についてふれておこう。前述したように、土師百井廃寺は私都川北岸で船伏山麓のやや急な丘陵地帯の小平坦地に位置しているが、私都川流域の平地を一望できるところである。土師百井廃寺の対岸には「倉ノ内」「兵庫」などの地名があること(郡衙には郡庁のほか正倉などの倉や兵器庫があった)から、その地が郡衙の地と推定されている。また因幡国府から美作・播磨への交通路がこのあたりを通っており、『日本後紀』に記されている八上郡莫男駅の地も地籍から石田百井(下道正田、上道正田、中道、的場向など)・土師百井(倉ノ内、兵庫)の地であるといわれている(中林保「因幡国」、藤岡謙二郎編『古代日本の交通路図』)。

以上のように土師百井廃寺の位置するあたりが、古代における八上郡の政治的中心地であり、山陰と山陽(美作・播磨)を結ぶ交通路の重要な地点であったことが知られ(このことはこの地が土師氏を中心として早くから開けていたことを意味する)、郡衙の地や道路から望むことのできる私都川対岸の高台の地に当廃寺を建立したものと考えられる。

## 第4章 まとめ

地元民や多くの人々の協力を得て2カ年にわたる調査を終了したが、前述したように期間を含めて幾多の制限があり、トレンチ発掘という小範囲の調査であったため全貌を明らかにすることはできなかった。しかし、いくつかの重要な事実を明確にすることはできたので、以下関連事項を含めてまとめておこう。

- (1) 伽藍は「法起寺式」であることが確定した。
- (2) 建築に際しては令大尺（高麗尺）が使用されていた。
- (3) 寺院の建立に自然地形の影響がかなり見受けられる。
- (4) 金堂は2次的な補修、補強が行なわれていることが明らかとなった。  
（伽藍の詳細については第8章・第一節を参照）
- (5) 寺域は一町四方と考えられるが、後世「字 慈住寺」の範囲に拡張されたと考えられる。
- (6) 中世の遺物はいくつか出土したが、中世以降に存在していた慈住寺の遺構は検出できなかつた。
- (7) 土師百井廃寺の軒丸瓦は二様式ある。

第1様式は從来報告されている上師百井式の重圓文八葉素弁蓮花文瓦——稜を有するものと無いものがある——と、無文で薄肉広弁の八葉素弁蓮花文瓦の第2様式である。

- (8) 軒平瓦は使用されていないものと考えられていたが、ごく簡単な重弧文の軒平瓦片が出土した。この軒平瓦は軒丸瓦の土師百井廃寺第2様式と対になると考えられ、第1様式の軒丸瓦には特定の軒平瓦はなかったと思われる。
- (9) 奥谷瓦窯跡の正確な所在を山本博己氏の案内により再確認することができた。窯数は不明であるが、1窯の入口部は崩れてしまっており、前庭部からいくつかの瓦片を見い出すことができた。また近くに横穴らしいものを1基確認した。

以上、2次四期にわたる発掘調査の結果を述べてきたが、土師百井廃寺の調査が完了したわけではなく、中門をはじめ、金堂の堂規模や講堂基礎の確認、南大門、寺域のことなど数多くの問題点が残されている。このたびの発掘調査を出発点として、今後、近くの池田廃寺（通称「天寺」）<sup>あまぢら</sup>を含めて、機会あるごとに調査が重ねられ、より詳細な事実が明らかになることを望んでいる。

図版1



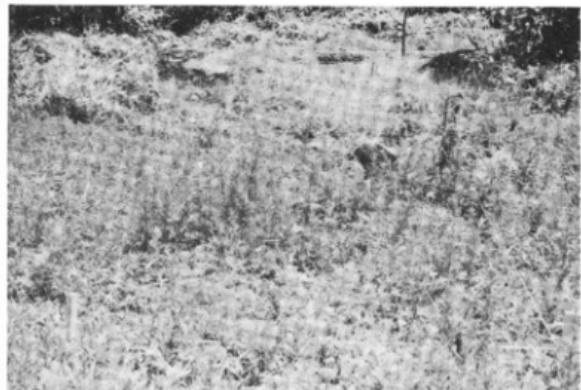
上 土師百井廃寺跡付近全景(北から)

下左 第2トレンチ調査前(東から)

下右 第2トレンチ金堂基壇(東南隅)



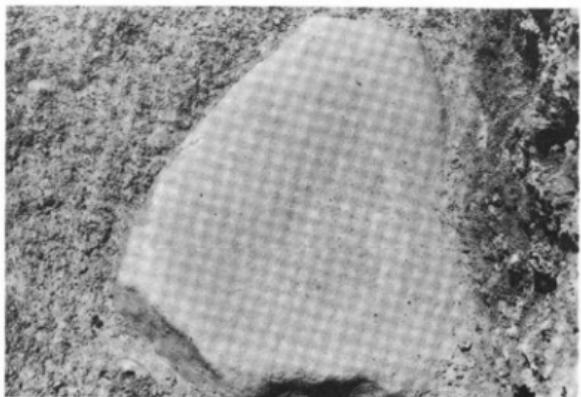
図版2



第3・5・6トレンチ  
発掘前(東から)

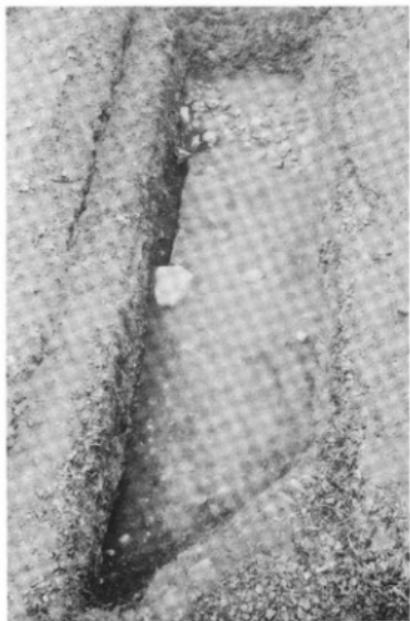


第3・5トレンチ  
金堂基壇(北端)



第4トレンチ  
回廊礎石

図版3

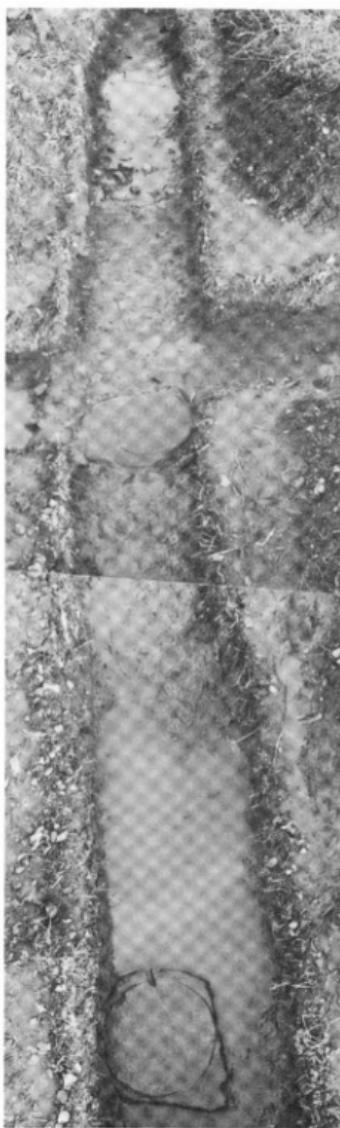


上左 第3・5トレンチ金堂基壇(北西隅)

下左 第4トレンチ回廊礎石(南から)

右 第7トレンチ(西から)

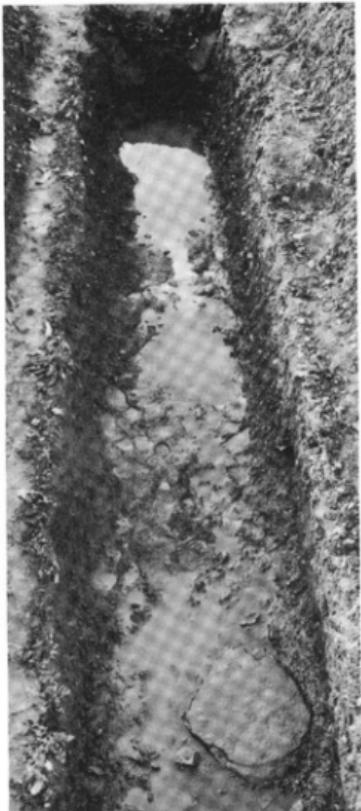
図版4



上左 第10トレンチ(東)  
下左 第10トレンチ(西)  
右 第13トレンチ(東)講堂礎石  
(西から)



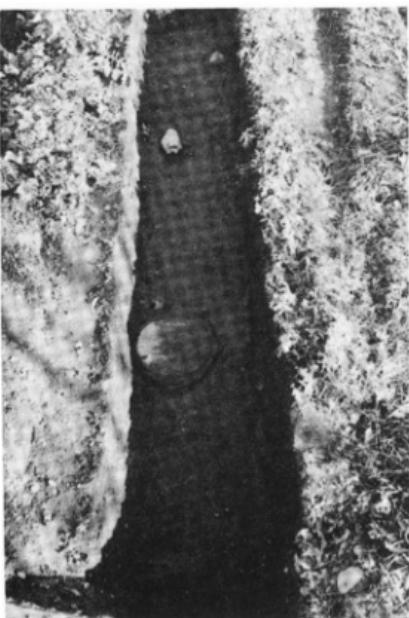
図版5

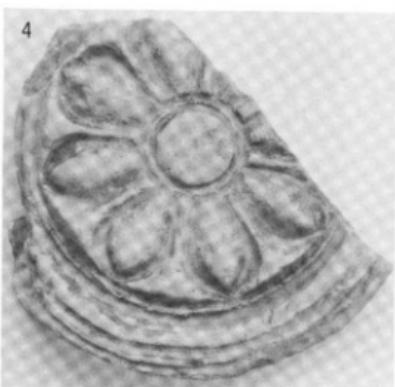
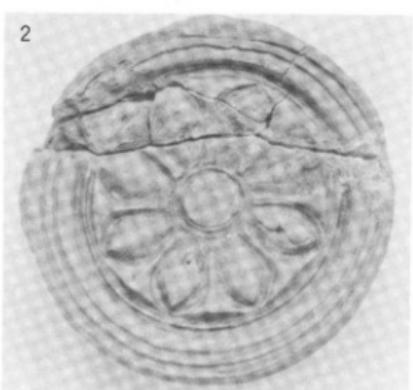


左 第13トレンチ(西)講堂礎石(東から)

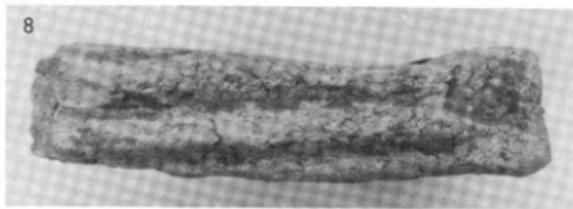
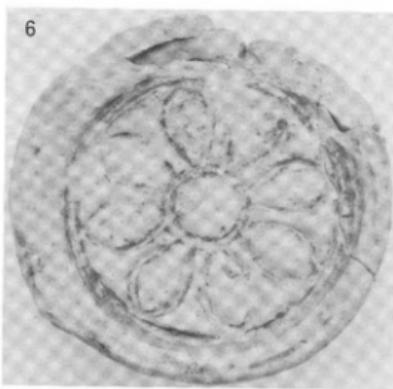
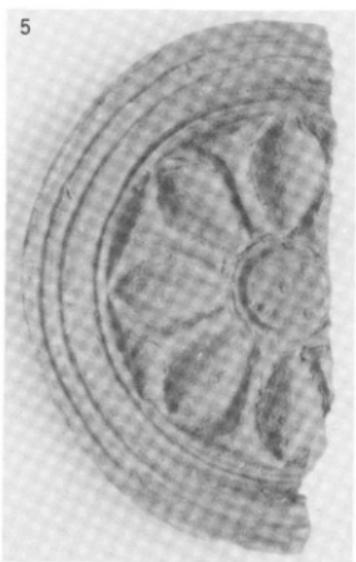
上右 第14トレンチ(西から)

下右 第16トレンチ講堂礎石(西から)



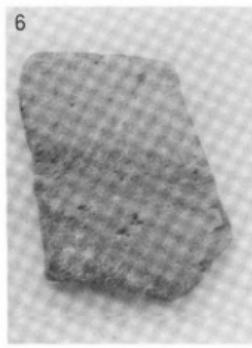
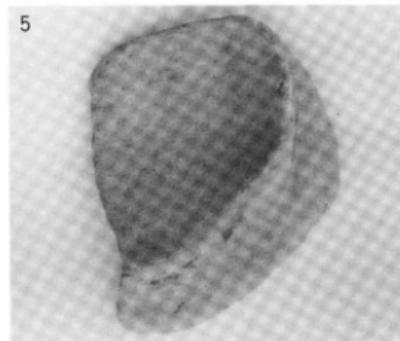
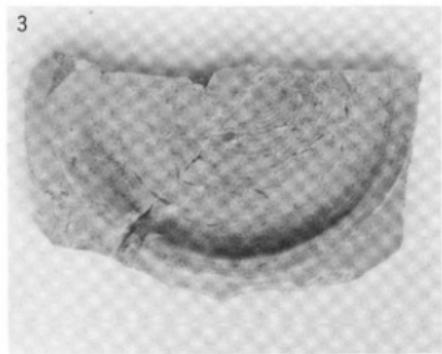
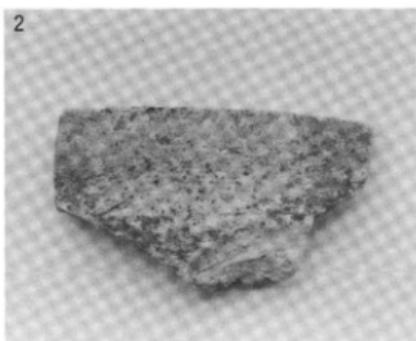
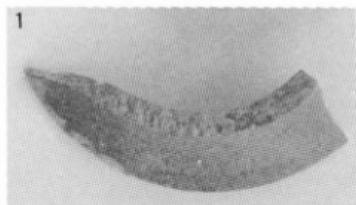


1 2 3 4 土師百井廃寺跡出土軒丸瓦



5 6 7 土師百井廐寺跡出土軒丸瓦  
8 土師百井廐寺跡出土軒平瓦

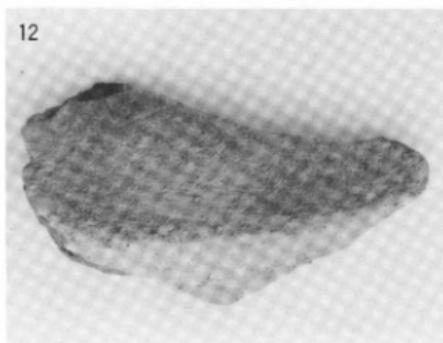
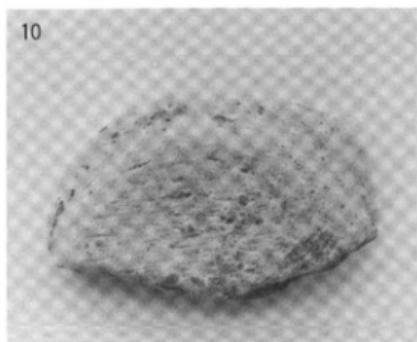
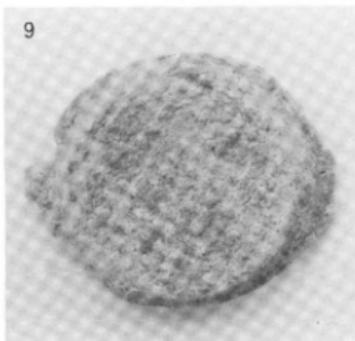
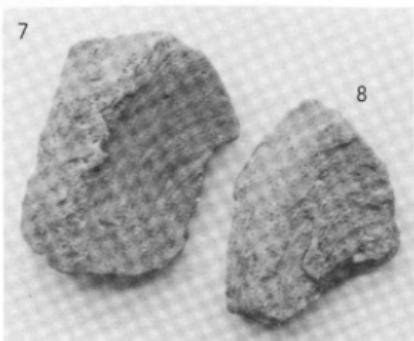
図版8



- 1 高杯の脚  
3 須恵器杯の高台部  
5 土師器

- 2 須恵器杯の口縁部  
4 土師質壺口縁部  
6 土師質碗口縁部

図版9



7 8 9 10 土師質塊底部

11 火鉢片

12 大甕底部

13



13 鉄釘  
下 奥谷瓦窯跡



■ 昭和55年3月20日 ■ 郡家町教育委員会発行 ■ 電話 (08587)2-0201